

＜今日の説教のポイント テモテへの手紙 I 5章1～16節＞

1 (1-3) 神の家族のあり方をこの世の家族から考えるパウロ。

30歳代でエフェソの教会の教師として牧会指導に当たるテモテ。その彼にパウロが全ての世代の教会員にどのように諭すべきかを教えています。宗教改革者カルヴァンは、「諭す」(1,2)から「罪を罰せず赦して寛容になれとテモテに教えているのではない」と断った上で、「相手の年齢に応じた仕方で忠告せねばならない」と語っています。

もう一つの特徴はパウロが、「自分の家族に対するとおって諭せ」と語っている点です。この世の家族は喧嘩することがあってもそれで縁を切ってしまうことはしません。「神の家族もそのことから考え、さらにそれにまさる家族なのだから」と教えているのです。教会は、どうしようもない罪人である私たちを赦して下さる神様を親とする新しい家族なのですから、この世の家族以上に、何を起こしても、諭され怒られることはあっても見捨てられることはない家族なのです。

2 (4-15) やもめへの尊敬、やもめ故の幸い。その内容が大事。

4節以降は、信仰者であるやもめが取り上げられています。大事なことは、主を信じたやもめの中に信仰者たちの尊敬を集め、信仰の幸いに生きるやもめのことが記されているということです(5,10)。そのような人たちがやもめとして「登録」(9,11)されていたようです。10節に尊敬される内容が、5節に幸いの内容が記されています。

同時に、その逆の人たちの姿も記されています(6,13)。パウロは「サタンの誘惑に負けた」(15)と表現して同じようにならないように注意を喚起するとともに、そうなる理由も考え、それを防ぐ方法も語っています。すなわち、若くしてやもめになった者には再婚を勧めて純潔の道を無理強ひせず(9-12。Iコリント7:39参照)、今風に言うなら「仕事をして、余計なことを考えたりしたりしないでいいようにしなさい」と勧めています(15)。

3 (16) ただ理想を追うのでなく、現実的に可能なことで取り組む。

パウロは、自分たちで何もかもやろうとしていません(16)。私たちは今も「罪人にして義人」(ルター)なのですからそれでいいのです。